

其 二

夏ふくる芒青野の照りかげり寂しくもあるか
立ちつつあれば

遠き世のコロポックルのもちしとふ土器カマドを掘
る木の間の畑はたけに

行く雲はかそかなれども谿につきて相聚あはれまれ
り夕づく青原

高原の小松にまじる女郎花色きはやかに夏の
日澄めり

秋の冷え早くもよほす松原の下生したかの芒穂を孕
みたり

白樺の木立の下の短か草曇れば寒くそよぎけるかも

蠶のあがり静まりて風呂にゐる妻をあはれとぞ思ふ歸り來りて

すいと蟲疊のうへに鳴きてをり蠶をあげしわが家のうちに

暴雨風の後

暴雨後のひかり明るきこの澤の底の道ゆく車の音す

暴雨はれてやうやくまさる出水の音この澤のうちに響きてきこゆ

あらし一夜おきゐて眠むきわがまなこ倒れし
家を驚き見てゐる

よべの間まのあらしの庭に散らばりし瓦を積み
ぬ縁下の土に

百日紅一

百日紅ひゃくにちぐさの花はな聚か合あまりて動き居り枝みながらに
暴風雨あらしに傾かき

あらし吹く百日紅の枝の起さかへりひろがる
見れば花は乏しき

日のあたる土の面見れば風のなかに捲れつつ
あり百日紅の幹

百日紅あらしに靡く時のまも蟲鳴き満てり草
叢のなかに

野分止みて雨ふりまざる夕ぐれどき工廠の銃
しきりに響く

其 二

暴風雨のなか心静かにさき居れば蟲鳴き満て
り家をめぐりて

ひたぶるに風にすぼめゆく傘のうへに逆靡き
せり百日紅の花

吹く風のいかなる折りぞ百日紅曇りのなかに
 明るく揺るるは

百日紅明かく日あたる庭のうへの空ゆく雲は
 いたく疾しも

海嘯のあと

洪水^{みづ}引きし師の家の道に泥ふかし爪^{つま}だてて歩
 び心安からず

潮水にひたりて枯れし睡蓮の花ただよへり道
 のべの沼に

泥のうへに渡せる板に遊びゐるわが先生の末
の子ひとり

溝川の泥はにほひ來かかるところに家の子をよき
逝かせたまへり

みづの後の日を暖かみ庭隅の柵に繋げり汚れ
たる牛を

潮の水いく日残れる田の中に倒れし稻を入刈
りてをり

溝川に人並びゐて濁りたる水に布洗ふ潮漬き
し布を

赤十字の旗立てし船のすすみ來る川に物棄つ
家々の窓ゆ

霧
雨

あやしくも下ろす雲かも落ちたぎつ流れをは
さむ赫岩の立ち

谿の道に煙草を吸ふと濕りたる燐寸を擦りぬ
霧雨のなかに

岩かげに立ちてわが吸ふ煙草の火赤く見えた
りふかき霧雨

霧の雨は、れて寂しき山くぼの羊齒の雫に肩霑
らしつる

青き葉にたまりて落つる霧雨の雫の寒きこの
眞晝かも

牟禮驛

眼のうへの櫟の山のふくらみに焚かぬ炭竈の
口二つ見ゆ

土剝げて岩あらはるる芝山の立ちのふくらみ
に風吹く音す

櫟葉は冬落ちざれば雪とけて雫をあとす楮土
の上に

枯芝原草鞋を穿きてかへり行く小學校の先生
ひとり

わが心静かになりぬ谿底の杉むらの秀を見つ
つしあれば 上林一首

落葉松

落葉松かむまつの色づくおそし淺間山すでに眞白く雪
降る見れば

色づきて寂しくもあるか雪山の裾にかたむく
落葉松林

この原の枯芝色に似て立てる落葉松の葉は散
るべくなりぬ

いちじるく雪照る山の下にして落葉松原は忽
ち暮れぬ

山裾にありと知らるる川の瀬の音のきこゆる
この夕かも

枯芝の土にあらはれし石のあたま腰かけて居
て日ぐれとなりぬ

夕晴れの空に風あれや著るく浅間の山の烟は
くだる

枯芝の裾野をのぼり近づきて低くし見ゆる浅
間の山頂 大正七年改訂

霜 月

窓の外とに白き八つ手の花咲きてこころ寂しき
冬は來にけり

一かぶの八つ手の花の咲き出でしわが庭の木
にのこる葉もなし

霜どけの日の照りぬれば楓かへての木一とくに葉の
落つるにやあらむ

一ぼんの幹をめぐりて落ちしきる楓樹かへての紅葉
ここだくたまる

わが妻はいとまなければ楓葉の落ちしきる庭
に衣洗ひ乾せり

物を乾すわが庭の木に朝なあさな四十雀来る
冬となりけり

○

野分の雨いたくあれたる壁のしめりひと日乾
かず日は照らせども

佐久の原

林の中笛を鳴らしてわが汽車の止まれば我れ
の眼ざめけるかも

冬の木の林にとまるわが汽車の鐘音ひびく夜
の林に

月の夜の霜白く降り窓の外に驛の名呼びて
とほる杳音

有明の月明らけし淺間山谿に烟の沈みたる見
ゆ

片寄りに烟はくだる淺間根の雪いちじるし有
明月夜

わが子

十月長男政彦信濃より来る。十一月上旬下谷神尾病院に入り鼻を治療す。

病院に我が子を伴つて道とほし落葉ころがる
日暮れの坂に

足袋買ひて子に穿かしめぬ木枯の落葉吹き下ちろ
す坂下の街に

落葉せる大けやきき櫛の幹のまへを二人通りぬ物言
ひながら

忙がしき我れの仕事を思ひつつ子を守り行く
冬木のまへを

坂の上を音してとほる電車には既に灯ともれ
り嵐の日暮

國遠く來つるわが子を埃あがる日ぐれの坂に
歩ましめ居り

木枯の埃吹きあぐる坂のうへの空紅くれないに夕焼け
てあり

護國寺の木群こむらをふかみ日暮るれば木兎うさぎ啼く聞
ゆこの街の中へ

木枯の街のはづれに灯明かきは小學校の夜學
なるべし

山門は早くとさせり木枯の冬木を鳴らす夜の
空の晴れ

山門の冬木の下に灯火とうしもつ車夫くるまものを言ふ過
ぎゆく我に

龜原

木枯の吹きしづまりて日の暮るる二階の縁に
 土埃を掃くも

冬空は夕焼すれど埃掃く二階の縁はすでに小
 暗し

逝く子

病むこと十日。十二月十八日午前零時半
 小石川病院に逝く。

ひたすらに面わをまもれり悲しみの心しばら
 く我におこらず

むらぎもの心しづまりて聞くものかわれの子
 どもの息終るおとを

ふるさとよりはるばる來つる祖父おはぢぢにものを言
ひたりこの日のくれまで

おほぢ吾の荒れし手のひらをさすりつつ國に
かへりし思ひすと言ひつ

日の暮れまでおほぢぢの手をとりてよろこび
たはやすきかもわが子の命は

顔のうへに涙おとさじとおもひたりひたぶる
に守る目をまたたかず

○

この世に汝いましやはある吾おれの子の手をとり握
りひたすらにあり

硝子戸の外のものに星は照り満てりたちまちに
して我が子はあらぬ

幼きより生みの母親を知らずしていゆくこの
子の顔をながめつ

玉きはる命のまへに欲りし水をこらへて居よ
と我は言ひつる

田舎の帽子かぶりて來し汝れをあはれに思ひ
おもかげに消えず

山の村の隣人らに暇告げて來つる道には歸る
ことなし

ふたつの歳眼をやみしかば手をひき歩み思ひ
は永くこの子にのこらむ

弟妹らの悲しみ座りゐる前にかへり來れり知
ることもなし

子をまもる夜のあかときは静かなればものを
言ひたりわが妻とわれと

○

とめどなく我の眼より涙ながれ友に面むかひ
悔いてとまらず

友を見てはじめて心やすまれり堪らへてあり
し涙ながるも

枕べに幾夜をとほし疲れたる心やすまり今日
涙出づ

ゆくものは止とどまることなし護國寺の冬木の森
に日は間まなく照るも

あわただしく命はゆきぬわが家の窓に日あたり
りきのふのごとし

父われを時のますらも口に呼び今もよぶかも
物書きてあれば

いまはなる言ことわすれめや枕べに父の居らくは
幾年いくとせぶりぞと

釣臺を搖するなかれと思おもひしかば我が手をか
けて坂をのぼりき 入院の日を想ふ

釣臺のそとより我の呼びしとき應こたへし吾わが子を
生なくると思ひき

○
かぎろひの夕べの庭に出でて見つかへること
なき命をおもひて

國遠くもちてかへりぬ書だくみがかきてたび
たる吾が子の面わを 逝く子一篇大正八年成る



大
正
七
年

正 月

心 疲るれば眠りて起さぬ冬の日
の明かき二階
にいく日ヒトも居り

佛壇に蠟燭ともすみじか日の真晝
の障子明る
くなれり

悲しみに馴れしに似たり冬の日の二階に物を
書き耽り居り

片側の雨戸を引きぬあかあかと日の照る晝の
風はげしさに

籠りゐてたがひに寂し時をりに二階の下に物
音する妻

たまさかに二階にのぼり來る妻にものうち語
る正月眞晝

いく日かここに籠れる乏しちに二階にとどく
冬木の梢

たえまなく嵐ふきゆく丘のうへの林のなかゆ
土埃あがるも

善光寺一

雪はれし夜の町の上を流るるは山よりくだる
霧にしあるらし

雪の上を流るる霧や低くからし天あめには満ちて
光る星見ゆ

おのが子の戒名もちて雪ふかき信濃の山の寺
に來にけり

のぼり行く坂のなかばより山門の雪の屋根見
ゆ星空の下に

夜の山へ向ひて長き坂の道雪くらくして星月
夜なる

山門に近づきけり雪かきて氷あらはるる坂
をのぼりて

屋根竝みの雪をふるして道狭し暗きあかりに
歩みを求む

其

一

晝明かき街のもなかに雪を捲くつむじの風は
立ち行きにけり

晴るる日の空にそびゆる山門より雪のまひ散
る風絶えまなし

善光寺山内さむし雪掃きて鳩あそびゐる長さ
舗石道

雪あれの風にかぢけたる手を入るる懐のなかに木の位牌あり

山門に向ひてのぼる大どほり雪厚くして黒土を見ず

言ことにいでて言ふはたやすし直ひた照てりに照る雪の上うへに我ひとりなる

雪ふかき街に日照ればきはやかに店ぬち暗くこもる人見ゆ

校正室

ただ一つ小さき火鉢置かれたり手のひらあぶれば手のうらさむし

紅梅

磯の上にひまなき風の吹き揺する紅梅の花は
大かた蒼

潮風ははげしくあれや湯の窓ゆ揺すれて見ゆる紅梅の花

紅梅の花を揺すぶる潮風の寒さにおどろく湯の窓をあけて

湯氣こもる湯のまど明けてなやましき我が息つきぬ寒き潮風

わが汽車の林の中にあることを醒めて知りしは何時なりけむ 歸京即日校正

みすず刈る信濃の國に旅だつと錢よみて居り
雪ふる窓に

春の雪おほくたまれり旅立たむ心しづまり爐
にあたり居り

○

君が歌つひに來らず待ちまちて今日の日ぐれ
に校正を終る

千櫓に與ふ

一昨日も昨日も待てりこの日ぐれ校正を終へ
て安からめやも

中村は病み齋藤は忙いそがしみ君が歌さへアララギ
になし

我等の道つみに寂しと思ふゆゑにいよよます
ます友を恃たのめり

今日の日の今まで保たもちしアララギの命かなし
と君も思はむ

アララギに我一人なる歌を見て友ことごとく
寂しと思はむ

今日となれば都のうちに残りをる千櫓を恃め
り然かにはあらぬか

はじめより寂しきゆゑに相恃む心をもてり然
か思はぬか

たはやすくよしといふことを言ふなかれ火に
も水にも入るとふものを 四月二十九日

○

暮るるより音もきこえぬ龜原の村の冬木に曇
れる月夜

月の入る夜更けに聞けば林中りんちゆうに鶏なく家のあ
またありけり
ぬば玉の夜の更けぬればおのづから向ひの家
の赤子も泣かず

青海の波のもなかに山ありと思ひおどろき見
ることなかれ 一首新嘉坡に行く藤子に與ふ

浅間山

野のうへに立ちの短かき松林梅雨近くして雲
おほくなれり

野のうへの畠はたけのくろの鬼躑おに躑つくれなゐふかく
梅雨つゆ近づきぬ

榛はんの木の嫩葉の枝を刈り騒ぎをとこをみなら
野にこもり居り

草木瓜うりの花さかりなり火の山の低きに下りて
曇まる白雲

青荳原あそいまだ短しわが汽車は火山の下に近づ
きにけり

頂より烟をふるす淺間嶺の焼石原は青みたる
かも

山下の焼土原の草立ちぬ汽車とどまれば驚き
こゆ

通り雨すぎて明るし赭土道の矮松の花のしめ
りたる見ゆ 桔梗ヶ原

わが父

六月十四日早曉茅野驛下車、一里の峽道を歩
みて老父を訪ふ。老父年七十五、心甚だ安靜に
して却りて病後の頼み少なきを思はしむ。

ひたぶるに我を見たまふみ顔より涎を垂らし
給ふ尊さ

青山の雪かがやけりこの村に父は命をたもち
ています

雪のこる高山たかやますその村に来て畑道はたけみち行く父に逢
はむため

かへり來こしわが子の聲を知りたまへり晝の眠
りの眼をひらき給ふ

この眞晝聲する我を床のうへに遠眼をしつつ
待たせたまへり

夏芽ふく櫟林の家のうちに命をもてる父を見
にけり

若芽ふくくぬぎ林は朝さむし炬燵によりて我
が父います

古田のくぬぎが岡の下庵にふたたびも見む父
ならなくに

この眞晝布圍ふとんのうへに座すわりいますわか老父おやは
歡かびに似たり

わが兄三人皆夙あく逝しく

れわ一人命いのちのこれり年老おきないし父ちちの涎よだめを拭ぬひま
ゐらす

父ちちと我わがとあひ語かたること常つねのごとし耳みみに聲こゑきく
幾いくとかきあらむ

郭公かくこうの啼なくこゑ近ちかしちちのみのみの父ちちのへへに居ゐて
飯食いひふ我わがは

間あひだなく郭かつら公鳥こうどりのなくなべに我はまどろむ老父
の邊へに

川の音山にし響くまひるまの時の久しさ父の
かたはらに

くれなるに楓芽をふく窓のうちに父と我が居
るはただ一と日のみ

日のくれの床のうへより呼びかへし我を惜し
めり父の心は 薄暮家を辭す

○

白雲の山べの川を踏みわたり草鞋は濡れぬ水
漬ぶく小石に

高木の家

母一人臥ふりいませり庭のうへに胡桃くるみの青き花
落つるころ

空はれてさむき光さす胡桃の木花長くして葉
はまだ伸びぬ

庭のうへの二つところに掃きあつめし胡桃の
花はいくらもあらず

大き爐に我が焚きつけし火は燃えてものの音
せぬ晝のさびしさ

火をたきて烟こもれる窓さきの柿のわか葉は
いくらものびず

政彦の足音ききて鳴きしとふ山羊やまも賣られて
この家になし 亡子をおもふ

柿の木の若葉のうへに紅き月のぼりてさむき
夕となれり

この家に歸り來らむと思ひけり胡桃の花を庭
に掃きつつ

轉居前

關口町の家には只四ヶ月住みしのみ

朝の窓曇りて暑しはるばるに家にかへしたる
子の顔をおもふ

朝のまを座すわりて思ふ我れひとり移りてゆかむ
ところを知らず

荷をやりて夕戸を閉しぬこの家に妻子は歸り
來ることなし

荷を出して廣くなりたる室むろのうちにひとりの
我の心をたもつ

一人ゐる家の屋根にのぼりぬ遠き火事けむり
をあげつ藁わらのうへに

遠火事の煙うすれてこの家にひとり飯食む夕
となりぬ

夏ながら葉の散り落つる梅の木の下べの窓に
一人して居り

夏草は窓にとどけり籠りゐる一人ごころに堪
ふるこのごろ

土湯

故さとの稻田のなかの温泉に入りて子どもの
足を洗ひわが居り

湖べ田の低田ひくたのなかの溜り湯に子どもを洗ひ
時をすごしつ

おもしろがり子どもは止めず湯のはたの石と
動かせば出でくるこはろぎ蛭

田のなかの湯は土くさし眞晝来て我の子ども
の體からだを洗ふ

この村の秋蠶ま忙しみ田中なる湯あみどころに
来る人もなし

故郷の田ゐのいで湯の中にして思ひ出でけり
昔の人を

湯のまへの湖うみの石垣にとぶ波はいたくは飛ば
ず葦がくり飛ぶ

田のなかに掘りしいで湯は低ければ稻の出穂
見ゆ頭の上に

岩 山

岩山におほひかぶさる雨雲の雲脚平らに降くだり
つつあり

ひた押しに押ししてし降くだる雲のなかの山の脚見
ればすべて岩山

雲くだる岩山あひの粟畑に粟の穂むしる人ひ
とり居り

いとどしく暗くなりたる雲の下の山の畑に雨
落ち来る

野分すぎし岩山下の榛はすの葉は揉もまれて黒く枯
れたるが多し

野分すぎて再び曇る夕べ空岩山の上に雲を下
ろすも

野分すぎし岩山下の山田には倒れて水に漬つけ
る稲多し

天地のなしのまにまに生けらくものおほき力
をおのづからに得じむ 牛麿うまに與まふ一首

飯山町一

時雨雲はるれば見えぬ檜山にまじりて赤き柿
の木畑

檜山の窪みくぼみの村落に柿の果しるく色づ
きにけり

山あひを流るる大き川にそひて遠くさびしも
北國街道

冬がれの國とはなりぬ千曲川ちくまがは土濁りして虹た
つ雨雲

冬枯の村の人びと舟橋の板はづし居り洪水おほみづの
川に

上林温泉

くぬぎ葉のもみぢ素枯るる空さむし山の鴉の
疾くし飛ぶも

この山の小松にまじる芒の穂日は照らせども
暗きかげ多し

飯山町二

けながき冬に入るらし街の軒に大根を乾し竝
ぶる見れば

とんぼ飛ばぬ冬とはなりぬ街なかに筵をしき
て黍の穂たたく

山の時雨疾く來りぬ屋根低き一筋街のはづれ
を見れば

我ひとり旅人と見ゆ大根を乾し竝べたる街の
とほりに

いくつもの寺は見ゆれど鐘鳴らず冬山の町日
は暮れはてぬ

夜旅宿小集

わが宿に時雨ふる夜の集ひはてて山道三里歸
る人あり

いにしへの友におぼえある手くびの恙見つつ
親しき心もちをり

雨の音小夜ふけぬれば心親しはじめて逢ひし
人々とかたる

惠端禪師の墓

この町のうしろに低き山の落葉踏みのぼり行
く
我の足音

石の上に櫻の落葉うづたかし正受しやうじゆ老人らうじんねむり
ています

あわただしき心をもてりおくつきの櫻落葉踏
む
我の足音

丘に来て心なつかし生き死する人に生まれて
かへりたまはず

冬の雨あがりて寒し板屋根の低くそろへる街
を見おろす

北に向ふ道はてしなし冬がれの山低くなりて
川ひろがれり

番町の家一

霰あられふる冬とはなりぬこの街に借りてわが住む
二階のひと室

風邪ひきて二人の子ども寝て居りと故郷の妻
ゆ告げこしにけり

霰ふりてにはかに暗しとどきたる國のたより
を讀みつつをれば

おのれ盛りて飯を食べをり窓の曇りいよよ曇
りてみぞるる音す

二階下物賣りとほる聲さけば霰ふりつつ日の
暮れ早し

うどん賣る聲たちまちに遠くなりて我が家の
路地に霰ふる音

冬をとほす心寂しもの書きて肩凝りぬれば
頸根をまはす

一人して二階を戸ざすたそがれの霰の雨は雪
となりをり

みぞれ降りて寒けくもあるか向ひ家の屋根の
下なるうめもどきの果

雲低く下りゐる街筋に夕のあかり早くつき
たり

其 二

一つ室にわかもの二人我れ一人ふたりは寝ね
て軒の音す

尿すと外に出づれば霰ふる雲低くして街の灯
うつる

若ものは疲れて眠る我ひとり物書きて冬の曉
にいたる

人ふたり頭ならべて眠り居りもの書く私の机
の前に

靴うつ音を聞き居りかなしみの起る心を堪へ
おほせて

夜寒くして尿ゆまりに近し家人の枕またぎて下の室
をとほる

夜の街に電車の音の絶えしより時を經たりと
思ひつつもの書く

霜のおく夜や更けぬらし天井の鼠さわぎて燈
の揺る音す

一人して居ればぞ思ふ妻も子もこの夜の更け
に眠りつらむか

其 三

疥癢を堪らへおほせぬ居睡りゐる木曾馬吉の
頭あたまを見つめて

文机に向ふすなはち居睡れる頭のもなかを見
つめ我が居り

試験もなか二夜眠らで疲れたる木曾馬吉の居
睡りをおこす

居ねむりを搖すりておこす一日ひとひ疲れて机に向
ひし心を知れり

一つの電氣燈の下に机並べ馬吉よ起きよ我
も眠むたし

二人して澁茶をのみぬ工場工場の笛鳴りて冬の夜
いまだ明けず

大正八年

冬の雨

家裏の桑の畑はたけによごれたる古雪たたき雨降り
しきる

ひと平ひららに氷とぢたる湖みづうみに降り積める雪は山
につづけり

雨あまげ風かぜひた吹く湖のところどころ氷やぶれて
青き水見ゆ

山の家の冬ふけにけり老母を抱きて厠にかよ
ふわが妻

故さとの草くさ家いへのうちに子どもらの怠りを叱り
安き心あり

わが室に子ども騒げどもうるさからず物書さ
とほす元日二日

草家の夜の更けしるし寒くなる炬燵の火をば
自みづからあふぎつ

みじか日の障子あかるし時をよきて裏山の風
冬木を鳴らす

晝すぎとなりて日あたる縁さきの牡丹の冬芽
皮をかぶれり

小淵澤

國原をのぼる汽車おそし雪のうへに梢あらは
るる櫟の枯葉

池田町

雪ふかき街道すでに昏くらくなりて日かげる山あ
り日あたる山あり

水のなき川原をわたるながき橋日暮れてなほ
薄うす明ありあり

あらし吹く夕くらやみにふみてゆく川原の砂
は踏みごたへなし

川はらの砂道ながし眼向ひに池田の驛の灯は
見ゆれども

この驛の道ひろくして家低し雪の山おほくあ
らはれて見ゆ

二十年まへ住ひてありし驛に来て思ひいでけ
り亡き妻のことを

訪ぬべき人の家もなしこの宿の鉄を借りて爪
を切り居り

雨曇りいよよ小暗し山畑に流れをなせる雪解
の水 高木一首

追分原

曇りつつ夕日あたれり裾野原雪解のあとの草
みな伏して

雨^{あめ}あがり低く曇れり草がれの裾野の道すぢ遠
くまでとほる

冬を経て幹の色くろき落葉松の竝み立ち寒く
雨はあがりつ

火山灰に立ちの短かきからまつの林のところ
どころに雪あり

白樺の木の立ち疎^かしひたのぼる汽車道のへに
火を焚く炭竈

疎^{あらか}あらしからまつ林の赭土を深くし掘りて川
は激^{たぎ}ちつ

あわただしく子を喪へりこと忙^{せは}しみ汽車の中
にして眠る日おほし

草枯れとなりて久しも追分原行きかへりつつ
いくたびか通る

ウキルソン氏に寄す

提議正しきに似て初めより言行を二三に
せんとす。即ち作る。

益^{ます}荒^{あら}雄^をは一たびよしと思ふこと口にまうして
言^{こと}避^よけをせず

ますらをは罕^{まれ}に言擧げす玉きはる命をすてて
まれに言あげす

頭領の位すつるはたはやすし思ひいたらば命
もまにまに

人住まず荒れたる村をわれ聞けりまづものま
うせ白耳義のために

戦ひをなからしめむと言あげして戦の船をつ
くるといふか

講和大使

日の本のやまと男の子は一と言を惜しみまう
せか未だまうさず

わが同胞何に死にするシベリヤのみ雪のなか
に行きいたりて

正しきによりて亡ぶる國あらば亡ぶともよし
必ず亡びず

丹波丸の航程甚だ遅々たり

ひさかたの天の川原の神集かむひつどひをはりて
まゐる神あり

たもとほりい行きあくれしすめろぎの大み使
は自愛つとめたぶべし

大み船に乗りたる臣おみら數を知らずまささく在
りや夫れもかも知らず

波の上を行く船おそし日のもとこの國びと舉こり
愁ひおもへば 二月作

三
月

神經は弱りてわれは言ひしかば今日の日ねも
す妻は黙もくしつ

今日うけし試験危しと來て告ぐる子どもの顔
は親しきものを

子どもらみな我が顔いろをうかがへり兄の試
験の危しとききて

風あたる北窓の下今日ひと日寝てゐる我れに
胃のいたみあり

睡蓮

池水の底ひに見ゆる睡蓮は葉になりにつつ未だ短し

あな愛しおたまじやくしの一つびとつ命をもちて動きつつあり

番町

はやて風砂吹きつくる銀杏の樹幹太くして芽ぶきあくれつ

産土神の杉の木立にはさまれる辛夷樹の花はあぐれて咲けり 高木一首

本所の道

燕とぶ場末堀川兩岸に材木をおほく浮べ水狭
まれり

雨はれし材木河岸のところどころ芽をふく木
あり材木の間に

烟突の烟をおほみ濠ばたの立木の若芽おほく
よごれつ

川をはさむ家みな低し水のうへを遠くより來
るつばくらめ見ゆ

曇りふかき川の尻より船來り波をあげたり低
き街路に

濠の水みちて静けき心よりをちかへりつつ燕
はうごく

先生のむかしの家の前をとほり心さびしも足
をとどめず

先生の心をつぐに怠りのありと思はず七とせ
過ぎぬ

龜 戸

一としきり雨すぎしかば傘かさに日は照りかへる
水溜りより

通りすぐる雨暖し傘の柄もりの露に手のひら
濡れて

龜井戸の藤の蒼は堅ければ雫垂りを通り雨
過ぎて

假り住みの暗き障子のあひだより藤の花房を
わが仰ぎ見つ

先生の妻のみことに物を言ふ心のうちは寂し
くてあり

先生を思ふ

肥りたる膝のまへにゐて我が心あやに落ちる
し昔おもほゆ

鼻の息大きくなして告らしたるひたぶる言は
大き言魂

これの世のみ魂にむかひ我らが伴心をあつめ
ひたぶるにあり

子どもさび翁さびせし面影を思ひ出でつつあ
るが尊さ

大き面にさながら心満ちたまへりまのあたり
にし思ほゆるかな

みちのくに吉備に筑紫にちりぢりに別れし友
は戀ひて思はむ

戀ひおもふ友さへ遠しこれの世に命ながしと
誰か思はむ

面影を思ひいづるにたはやすし叱られしこと
多くしありて

紫雲英

赭土の山の日かげ田にげんげんの花咲く見れば
 春たけにけり

山の田に日かげをなせる檜の木の若葉は白く
 軟らかに見ゆ

この峽の上につきづぎに棚田なす高畦たかあぜ明かし
 夕焼の雲

汽車のうちに夕べ聞ゆる山の田の蛙のこゑは
 家思はしむ

わが村に道近づけり春すぎて短かき草に心ぞ
 うごく

わが家に月に一たび歸りゆくよるこび心寂し
くなりぬ

諏訪四賀村歌會

赤松林
一つ蟬鳴き止みてとほき蟬きこゆ山門そとの

瀧 温泉

水無月の曇りをあびて日の沈む空には山の重
なりあへり

梅雨ちかき曇りとなりぬ温泉の山の藤の稚蔓
道にのび居り

心ぐくなりて見て居り藪のなか通草の花を掌
の上におきて

小鳥らのいのち愛しも藪のなかの巢に産みて
ある五つの卵

温泉のうへの山を真直に下る道材を落すらむ
青葉かすれつ

郭公鳥

遠き村の火事の火見ゆる山のなか郭公鳥は夜
を鳴きて居り

湖むかひ火事の炎立てり梅雨のふる雨戸をあ
けて妻と見て居り

みづうみの向ひの火事にわが庭の木の立ち明
かし梅雨ふりながら

岡の家に妻と起きゐて知りにけり郭公鳥の夜
啼くことを

旅にして暮らす日おほしたまさかに妻と起き
ゐて茶を飲む真夜中まよなか

子を喪ひ母をうしなひ悲しみを知れる我が妻
に心したしむ

追分原一首

われ一人硝子の窓に頭あてて見てゐる野らは
いたく暗みぬ

大町

疊まれる白雲の上に竝み立てり朝日をうけて
 赭き岩山

夏の雪まだらかにあり疊まれる白雲のうへの
 岩山二つ

雲はれて山の近きに驚けりまさやかにある雪
 の谿々

雪のこる峯多くあり町なかに頭またまをあげて心お
 どろく

梅雨はれて明るくもあるか町屋根のうへにあ
 らはるる岩崩くえの山

日のあたる山竝み見れば谿々のくぼみ著るく
重なりあへり

山々の繁りをぐるしをちこちの岩崩えあかく
日はあたりつつ

五月雨の雨あがりたる山々の木をかうじりて
重なる寂しさ

谿を出でて直ちにひろき川はらの栗の木林花
盛りなり

旅籠屋のうらより見れば森おほき安曇國原暗
くこもれり

はたご屋の朝あけ寒しくきやかに木のかげを
なすもろ葉の光り

山居

わが庭の柿の葉硬かたくなり
にけり土用の風の吹
く音きけば

夜涼秋の如し

庭のうへの天の川原は
この夕まさやかにして
浮雲に似たり

この岡の桑生くはふの下の湖みづうみに
天の川低く明るみて
見ゆ

初秋一日

柿の葉に青き果多くこもり居りはやて風吹く
はたけの中に

夏蠶桑すがれし畑にをりをりに降りくる雨は
夕立に似つ

體からだの汗拭きつつ思ふ今日このごろ蟬の少なく
なりたることを

土用もなか葉を剪きみたる庭のうへの松の太幹
明るくなりつ 松葉刈三首

土用もなか二日刈りたる松の葉の青き葉庭に
厚くたまりつ

松葉刈る鋏のおとする日もすがら垣そとの湖
暑く曇れり

常盤村

櫟原晝暑くして葉にこもる山蠶やまこの秋蠶あきこいまだ
稚わかなし

山蠶飼ふくぬぎが原のところどころあたたま出
す石はみな花崗石かこうせき

雨止みて日の照りあつき櫟生のみかげの砂は
歩むに堅し

山の蠶を飼ふときおそし櫟原砂地の草のいろ
かはる見れば

山の田の水を落して捕りし鯉桶にかつぎて來
る爺あり

歸 國 一

夜汽車を下りて家路に向ふ

遠く来て夜あくる霧は道ばたの苧り田の株きに
下りつつ見ゆ

曉の霧のなかより近づける冬田つづきの湖に
音なし

霧ふかき湖べの道を來るらしき荷車の音久し
く聞ゆ

わが家まで遠しとおもふ霧のなか懐手して歩
みつつ居り

汽車を下りて遠く來れる霧のなかに濕れたる
顔を拭ひつつ居り

山下道小暗くらき霧のなかにして學校にゆく我が
子に逢へり

次の朝

家のうら畑はたけつづきの草山に雪ふりながら赤ら
む朝空

其二

雪降れば山よりくだる小鳥おほし障子のそと
に日ねもす聞ゆ

裏山に木を挽くひびき家のうちに聞けば間ま近ぢか
く出て見れば遠し

木枯の吹き荒れぬれば家のうちいよよ静まり
我が一人居り

まがなしき命つづかむたまさかに我が家のう
ちに籠りゐて思ふ

子どもらのたはれ言こそうれしけれ寂しき時
に我は笑ふも

雨の音聞きつつあれば軒下の土と落葉とわか
れて聞ゆ

二とせまへい逝きし吾子が書きし文靴ふみかぜんに入れ
て旅立たむとす

二日居りし疊の上に煙草火の燃えあとのこし
我去らむとす

二階

人の家の二階一と室まに物を書く冬の日數の久
しくなりぬ

ものを書く二階の下に人の音日ねもすすれど
も關はるることなし

冬いく日ものを言はざること馴れて物を書
き居り障子の下に

日のひかり明るくもあるか窓のまへに冬枯と
なりし銀杏の木の肌

都の空師し走すに入りて曇りおほし心疲れて障子
をひらく

おほき都の薨のうへの曇り空日は残れるか没
りしかわからず

時どきに物に誘ひに来る人の今日も来るやと
親しみて居り

彼^かに向ひものを言ふことなかるべし物言はず
してつひに終るか

大正九年

冬
の
日

冬空の日の脚いたくかたよりて我が草家の窓
にとどかず

冬ふけて久しとおもふ日の脚は土藏のうへに
高くのぼらず

日かげ土かたく凍れる庭の上を鼠走りて土藏
に入りたり

わが家の池の底ひに冬久し沈める魚の動くこ
となし

冬の日の光とほれる池の底に泥をかうむりて
動かぬうろくづ

土荒れて石ころおほきこの村の坂にむかひて
入る日はやさ

わが筆の穂さきこほりて墨うすし心せはしく
書きつぎて居り

明りうすきこの部屋のなかに座りゐて痛みお
ぼゆる膝を伸すも

氷湖一

ここにして坂の下なる湖みづうみの氷うづめて雪積りをり

みづうみの氷に立てる人の聲坂のうへまで響きて聞ゆ

遠き沖の氷をたたく漁つ槌ちの音槌ちにおくれて響きつつあり

朝なあさな人ら曳きおろす材木の木の皮つけり凍れる坂に

朝なあさなわれ馴れけらし戸をあけて顔にしひびく寒さをおぼゆ

この冬は母亡くなりて用少なし心さびしと妻
のいふなる

この村につひにかへり住む時あらむ立ちつ
ぞ見る氷れる湖を

沖つ風ひた吹きあつる磯ばたの凍りばしやぎ
の街道のほこり

其

二

いく日ヒもつづきて晴るる湖みづうみの氷を切りて冬田
に積みり

磯の田にいく日ヒにかならむ積みてある氷の群
れのとくることなし

田の中に爪もて我のたたき見る堅き氷に日の
あたりをり

氷切りて漁りたる魚は生きてあり山の我が家
にくばりて持て來

山の田の清水に魚を放ち來し子どもの足は泥
にこそえつ

共 三

ひた吹きに氷の湖に吹く風の暖くして曇りを
おくる

暖き風疾く吹きて日のあたる氷の湖は霑れい
ろになれり

氷の湖の沖に大きな穴あけり雲の動きのす
みやかになりて

つきづぎに氷をやぶる沖つ波濁りをあげてひ
ろがりてあり

坂下の湖の氷のやぶるるを嵐のなかに立ちて
見てをり

沖べより氷やぶるる湖の波のひびきのひるが
り聞ゆ

ひろき土間に巢箱ならべる解し雞あらし一日
を静まりて居り

春の嵐吹きて小暗し庭のうへの胡桃の幹は揺
すれつつあり

春
雨

土田耕平六年振りにて大島より歸る。三月二十五日耕平馬吉と予とアララギ發行所に邂逅す。終日爐を擁して語る

雨のふるひと日炬燵に向ひゐて詞すくなき樂
しさをもてり

おのもく逢ふ日少なし話することはあらな
くに親しみて居り

雨の音友の二人の話すなかに睡くなりつつ惜
しく思ほゆ

おのおの爲事やすみて今日ひと日語りくら
せりいつかまた逢はむ

みんなみの島への道をわれ知れり一人歸り行
く姿をおもふ

ひそかなる命まもりて住み馴れし島の家居に
かへるといふか

これの世になすこと多き命もてり一人はつよ
く一人はよわく

軒下の紅梅の花にふりそそぐ春雨さむし雪に
かならむ

水 魚 終

卷末記

大正四年から大正九年までの短歌八百七十九首を本集に収めた。その内四十六首は新に作つたものや、未だ世に發表せなかつたものである。全體を讀み返して見て衷心忸怩たるものが多いが、今回は多く削らぬことにした。

配列は多く制作の年次に従つたけれども、歌によつては、事の年次に従つて編み入れたものもある。さういふものは、一々その旨を附記して置いた。

予は或事に遭遇してその感銘を歌に現す場合に、可なり多くの時間を用ひることがある。或ものは一年以上を費したこともある。夫れを名譽とは思つてゐない。自分の

技巧が自分の感銘を現すに足らないために同じものを何時までもつついて居らねばならぬのである。予の一聯作の歌の中には、或は事に引きついで成つたものもあり、或は事をずつと経過してから成つたものもある。経過してから成つたのは必しも経過してから作りはじめたのではない。時間を費すこと少くして出来あがることは予と雖も希ふ所であるが、今は致し方がないのである。今迄予の制作の態度について言議をたまはつた方々もあると思ふから此の機会にこの事を明かにして置かうと思ふのである。

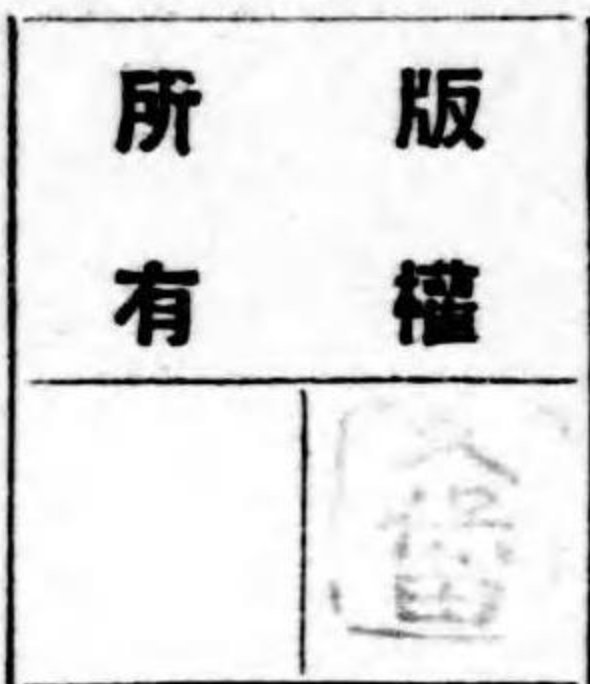
予は先輩諸氏及びアララギ諸同人から斷えず鞭撻と激勵とを受けて作歌を勉強してゐる。齋藤茂吉氏からは昨

年來屢々本書刊行を促されてゐる。今年は故伊藤左千夫先生の歌集が刊行される筈になつて居り、齋藤氏の第二歌集も刊行される事になつて居る。予の集が夫れ等と打揃うて世に出ることを、おほけなく且つ歡ばしく思ふ。平福百穂畫伯よりは多年深い感銘を蒙つてゐる。今回又々装に口繪に配慮を蒙りしこと感謝に堪へぬ。殊に今回は平素予の尊敬する森田恒友畫伯に乞うて挿畫を頂くことを得たのは感謝に堪へぬ次第である。岩波茂雄氏よりは多年異常なる御高志を蒙つてゐる。本書刊行につきても昨年来配慮を賜はり多大の厚意を以つてこの書を刊行して下さつたことを深く感謝する。本書の原稿を蒐集せられたは木曾馬吉氏と高木今衛氏であり、筆寫の勞を執られ

たのは高木今衛氏である。深く厚意を感謝する。昨日庭前の八重櫻の花に雷雨があり、今日天澄みて風が寒い。予は此筆を収めて明日信濃の家に歸らうとする。
 大正九年四月二十三日。麴町下六番町の假居に之を記す。

大正九年六月十日印 刷
 大正九年六月廿日發行

永魚奥付
 定價貳圓五拾錢



著 者	東京市麴町區下六番町二十七番地 久保 田 俊 彦
發 行 者	東京市神田區南神保町十六番地 岩 波 茂 雄
印 刷 者	東京市本込區市谷加賀町一丁目十二番地 中 田 福 三 郎

刷印場工一第舍英秀社會式株

發行所

東京市神田區
南神保町十六番地

岩 波 書 店

電話九段 一一二八〇番
 振替東京 二六二四〇番

157
107



終

